

ガルシア・マルケスの意外な一面

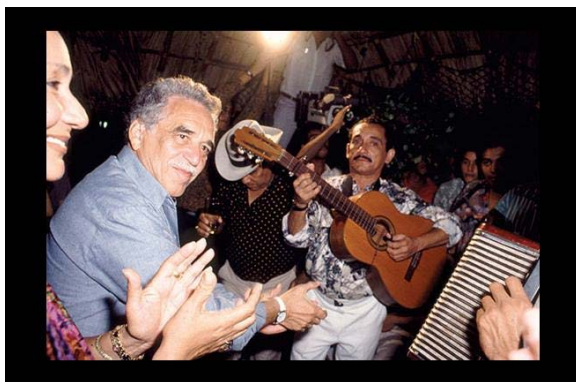
今年4月17日に亡くなった、おそらくはラテンアメリカで20世紀最高の人気作家といってもよい、ガブリエル・ガルシア・マルケス(1927-2014)が、映画にも大きな関心をもっていたことは、良く知られていることです。30歳までは、ほぼ毎日のように映画館に通い、映画評論を書き、ローマのイタリア国立映画実験センターで映画制作を学んだと自ら語っています。1979年にはハバナで開催された第1回新ラテンアメリカ映画国際フェスティバルのフィクション部門の審査委員長でしたし、1986年にキューバで設立された国際映画・テレビ学校(EICTV)は、ガーボ(ガルシア・マルケスは一般にガーボという愛称で呼ばれます)とフィデル(カストロ)の発案でした。



ガーボは、好きな映画監督としては、オーソン・ウエルズ(『市民ケーン』)、黒沢(『赤ひげ』)、トリュフォー(『突然炎のごとく』)、ロッセリーニ(『ロベレ将軍』)、ルイ・ゲーラ(ブラジル、1931-、『小銃』)を挙げています。日本映画では、戦後初期の作品の中で、『真昼の暗黒』、『蟹工船』、『原爆の子』、『羅生門』、『七人の侍』を世界の映画史に残る作品と絶賛しています。

ところで、実は、ガーボは、大の音楽好きでした。ガーボのトレードマークの口ひげは、彼が大好きなキューバ人のボレーロ歌手、ビエンベニード・グランダ(1915-1983)にあやかったものであると、ガーボ自身語っています。

キューバ・ボレーロというポピュラー音楽は、スペインのボレーロ(18世紀末発祥、4分の3拍子)と違って、4分の4拍子で、1870年代頃、キューバのサンティアゴ・デ・クー



ボレーロを楽しむガーボ

バで生まれました。中でも、ホセ・ペペ・サンチェス(1856-1918)がスタイルを完成させ、その作品『悲しみ』(1833)がキューバ・ボレーロの最初の作品といわれています。その後ボレーロは人気を博し、メキシコからラテンアメリカ全体に広がり、庶民の喜び、悲しみ、嘆き、哀愁、愛、別れの気持ちを歌うジャンルとして確立します。あえていえば、日本の演歌にあたるでしょうか。

「ボレーロは、私にとって大変好きだという以上のもので、私が、また私の世代の多くの人々が感動している感情、状況を表現するものです。ボレーロは、恋人同士をもっと愛し合うようにさせます。ひとときであっても、恋人同士をより愛し合うようにできるという

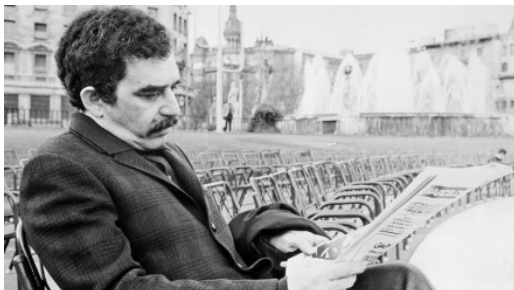
ことは文化的に重要ですし、もし文化的に重要ならば、革命的なことなのです」と、ガーボは、ボレーロの本質を語っています。

ビエンベニードは、ソノーラ・マタンセーラ（グループバンド）のボーカルとして活躍し、その後ソリストとなりました。コロンビアや中米諸国、メキシコで演奏活動を行い、いろいろなジャンルの中で、ボレーロが最も得意で、オリジナルなスタイルで歌い、高音に人気がありました。ビエンベニードは、ふさふさとした口ひげを蓄えていましたので、「歌う口ひげ」と呼ばれていました。若きガーボの口ひげも大きく、ふさふさしていましたが、そこから、ガーボは友達の間で、「書き物をする口ひげ」と呼ばれました。

1955年コロンビアで執筆していた新聞「エル・エスペクトドル」でのガーボの記事が、時のグスタボ・ロハス・ピネージャ軍事政権に検閲を受けてにらまれ、ガーボはヨーロッパに特派員として派遣されます。そして1955年12月パリに住むようになります。パリでは、ラテンアメリカ人が住む場末の町の安ホテル「フランドル」に逗留します。そこには、のちほどキューバの国民的詩人と評価されるニコラス・ギジェン(1902-89)が、独裁者バチスタの追求を逃れて1952年からパリに滞在しており、同じホテルに宿泊していました。ギジェンは、毎日早朝に窓を開けて、その日のラテンアメリカに関する記事を外に向かってフランス語からスペイン語に訳して大きな声で読み上げていたといいます。詩人と小説家は、親交を結びます。

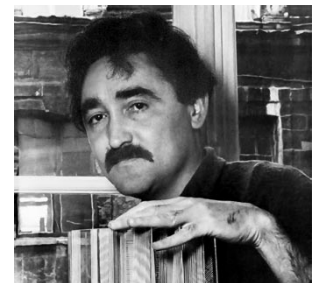


ニコラス・ギジェン



☞パリ時代のガーボ

『エル・エスペクトドル』紙は、やがて56年1月ピネージャ政権の圧力により閉鎖され、送金も途絶えて、ガーボは、生活に困窮してしまいます。まさに赤貧洗うがごとの生活で、地下鉄の切符を買う金もなく、見知らぬ人に恵んでもらったともいいます。そこで、ガーボは、モンシュール・ル・プランス街にあるラテンアメリカ人の亡命者のたまり場の酒場「レスカール」で、ベネズエラ人の画家のヘスス・ソト(1923-2005)のギターの伴奏で専門の歌手として、メキシコの歌やキューバのボレーロを歌います。一日1ドル程度の稼ぎでした。ポピュラー音楽を歌い、まさに糊口を凌いだわけです。収入はわずかだったものの、ボレーロを歌っているとき、暗闇で愛を語っている恋人を見るのは、楽しいものだったとガーボは述懐しています。この時、ガーボは、『悪い時』、『大佐に手紙は来ない』を執筆中でした。



ヘスス・ソト

パリ時代の恋人、バスク人のタチア・ロソフさんは、「ガーボは当時フランス語を勉強しており、ジョルジュ・ブラッサンス（1921-81、歌手、詩人）の歌を良く聞いていました。ガーボの歌は素晴らしかった。バスの中で、『深い傷』（コロンビアの曲、作詞ディオメデス・ディアス、作曲ラファエル・エスカローナ）や『空中の家』（作詞・作曲ラファエル・エスカローナ）を歌って日銭を稼いでいました」と語っています。

ガーボの手紙を示すタチアさん⇒

ガーボは、パリで、メキシコ人作家のカルロス・フエンテス(1928-2012、小説『アウラ・純な魂』木村栄一訳 岩波書店 1995年)とメキシコのランチェーラやキューバのソンを一緒に歌った歌を集めたカセットを録音していますが、公開されてはいません。幻のカセットとなっています。



その後、1979年には、ドミニカのサント・ドミンゴのキャバレーで、司会がガーボをコロンビア人の歌手ガブリエル・ガルシアと紹介し、歌を歌ったことがあります。聴衆は、歌手がガルシア・マルケスと気づかず、歌が終わると、無関心と喝采が入り混じった感じで彼を見送ったと、友人の一人、キューバ人の詩人ラウル・リベラは回想しています。リベラは、処女作『落葉』（1955年）の作家は、最初の道が続けてよかったと述べています。

「私は音楽が好きで、親友といるときは、なによりも音楽について話をするのが好きです。本よりもレコードを多く持っています。私は、グランダについて聞かれるのが好きです。



多くの知識人は、ポピュラー音楽が好きだと知られるのを恥ずかしがるものです。私は、好きなボレーロが好きだということを誇りに思います。私は、その文化の中で成長したのですし、文化、カリブ文化は私の一部だからです」とガーボは、自らと音楽の関係を率直に語っています。

ガーボは、「音楽について語る時、ボレーロについて語らないなら、何も語っていることにはならない」というほどのボレーロ好きでした。もともと、クラシック音楽にも造詣が深く、孤島に一枚だけレコードを持っていくとすれば、バッハの無伴奏チェロ組曲第一番だとも述べています。

ガーボは、『百年の孤独』は、450ページのバジェナート（コロンビアのカリブ海岸地方の民族音楽）で、『コレラの時代の愛』は、380ページのボレーロで、『独裁者の秋』はベラ・バルトーク（1881-1945、ハンガリーの作曲家、ピアニスト）の協奏曲の構造で書いた

と述べています。

今年になって、ガーボと親友であったペルー出身の歌手のタニア・リベルター（1952-）さんが、近くガーボの愛好したボレーロを集めた CD を、6月の後半にキューバで開催される「第25回ゴールド・ボレーロ国際フェスティバル」の開催の機会に、リリースすると発表されました。タニアさんは、ペルーでアイドル歌手の地位を約束されていましたが、当時の「新しい歌」運動に関心をもち、メキシコに移り、シンガーソングライターとして活躍します。代表作の CD『アルフォンシーナと海』（作詞アルフォンシーナ・ストルニ、作曲アリエル・ラミレス/フェリックス・ルナ）は、ラテンアメリカ音楽評論家の竹村淳さんによって激賞されています。ボレーロ集の CD の曲名のラインアップは発表されていませんが、その中には、ガーボが最も好きだった『さすらいの雲』が含まれるといます。この曲は、メキシコのチアパス出身のインディオの歌手、ホルヘ・マシアス（1948-）が作詞、作曲したものです。 **歌手タニア・リベルター⇒**



『さすらいの雲』の歌詞は次のとおりです（筆者仮訳）。

おまえ、私は、孤独な中で、君の思い出から離れきれない
おまえ、何年もたったね、でも私の不幸な気持ちは癒しようがない
おまえ、私はまったくくじけてしまい、たたかう力もない。
おまえ、私は、確かにこれまでと同じように思い出にふけているよ
おまえがいる空では、流れていった雲も私を懐かしんではいないだろうね
というのは、お前は私の命の光を照らしに来てくれないから。
すぐ戻ってきておくれ、お前と一緒にないと、私は生きていけないから
さすらいの雲よ、流れゆくのをやめて、家にもどっておくれ。
そして一度でよいから、すべての愛を差しのべておくれ
もう一度帰って来て、再び遠くに去るのだろうが。

ガーボがなぜこの『さすらいの雲』が最も好きだったかは、書き残していませんが、ガーボの永遠の創作テーマが、「孤独」であったことを考えると、彼が、一小節目に「孤独の中で」とうたわれるこの歌に聞きほれたことが想像されます。曲自体は、ランチェーロ＝ボレーロ形式で、心にしみわたる名曲です。

（2014年6月28日 新藤通弘）